



島田さま

十二月一日

書籍の返本については、『望星』の二〇二〇年七月号でも島田さんは書いていましたね。システム。そうですね、そのように回ってきた、というのは理解できます。改善の余地が多々ある作業ですね。

大きな書店に籍を置いていたとき、それこそが仕事というくらいに大量に返本を作っていました。書店の返本の仕方の問題で本が傷むという話は、『spin』（みずのわ出版）の「みずのわ編集室」でも読んだ気がします。

新しい店員が入ったとき、地域の学校の職場体験で生徒をあずかったとき、返本の作業を見せながら、このお店から出版社に戻った本が注文に合わせてまた日本のどこかのお店に出荷されるという話をします。それを伝えないと、入るだけ力づくで入れてしまったり、作業に集中するあまり、本を傷めるような人の方をしてしまうことがある。作業が自分の目の前だけで完結してしまっていて、他の作業と結びつけられていないという場面に出会うことは少なくありません。人との関わりなく、個人の想像力で気が付ける範囲というの

はそんなに広くはありませんから、そういうことは伝えることで解消していくしかないのだろーと思っっています。島田さんがおっしゃるように、社会の中で作業が進んだことにより生まれる一つの側面ですね。

私は返本の話をしながら、島田さんのように面識がある方や、お店に回って来てくれる営業の方々や顔を思い浮かべます。人の顔が浮かぶというのは大きいですよ。その人に返す、という気持ちで作業をするようになります。けれど、それも私が人と会うような立場を得ているからというだけのこと、人の顔が浮かばないということ、ぞんざいになる、その危険は私自身も常に抱えていると思います。

本屋に本が入ってくる時も、大きな取次を経由して入ってくる時、箱詰め作業が甘かったり、雑だつたりで、本が傷んでいるということがあります。これもどこに届けるのかが見えていないことで起こる問題ですよ。折に触れてそのことを担当者に伝えますが、改善は見られません。担当者が怠けていると言いたいわけではありません。彼らはそれを問題だと思っていないわけではない。変えようともしている。けれど変わらない。それは、社会における本の立場を表し

ていると思っています。

私の中にある、本を、書物を、尊重する気持ちというのは本屋に身を置くようになって、本屋や取次や出版社の人たちから教えられたことではありませんでした。それを私に植えつけてくれたのは、親、祖父、それから本屋で出会ったお客さんでした。私は家で新聞や本を跨ぐことも許されなかったのですが、そのような環境を一般化することはできないにしても、本の立場をその社会の中ではつきりさせることは、本に関わるあらゆる業界にとっておざなりにできないことだと考えています。

返本と同様で、発注にも似たところがあつて、様々な人の顔を思い浮かべながら冊数を決めています。お客さんでも、会話のある人、名前だけ知っている人、顔だけしか知らない人、沢山いらっしゃいますし、作り手の人たちのことも考えます。昼休みや休みの日に、レコードショップ、古本屋、文房具屋、八百屋、パン屋、蕎麦屋、カレー屋、喫茶店、飲み屋、町のお店に行くときも、お店の人たちの顔を思い浮かべる。そこに行くという気持ちで行く。すべてコミュニケーション